

ガーネットの舟

小林倫子

◇登場人物

ユカ

ミキ

カホ

千エ

シズ

アニー
タ

暗闇の中響き渡る少女たちのささやき。

「あと少し、あと少しよ。」

軽やかな音楽。音楽が徐々に遠ざかると同時に少女たちの声が聞こえる。

「柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。」

「柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。」

「柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。」

「柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。」

歌うようにロズさみ川面にそよぐ柳のように四人の少女たちが現れる。

けたたましく鳴り響くベルの音。

重い機械音が響き渡る。古い巨大な工場の中。

中央に真っ直ぐに伸びた、ゆるやかに流れる川のようなベルトコンベア。

辺りには数々の使い込まれたおもちゃが転がっている。

窓の外は暗く、夜勤前の休憩時間。作業服にエプロンを着けた四人の少女たちは座り込んだり寝転んだりして夜を徹する労働に備えて体を休めている。

再び鳴り響くベルの音。

少女たちは欠伸をしながら体を伸ばし、合図もないのに揃って一斉におもちゃを思い思いの方法で動かし始める。どうやら工場で何かを製造する様々な工程らしい。

少女たち、歌とも呪文ともつかぬ言葉を唱えながら絶えず手を動かす。

四人

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

しばらく彼女たちの作業が続いたあと、突然一人の少女ミキが号令をかける。

ミキ

交代！

少女のうちチエを除く三人が素早く持ち場を交代し、ひたすら作業に取り掛かる。

四人

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。
柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。
柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。
柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

ミキ

交代！

再びミキの声と共にチエ以外の三人が素早く持ち場を交代し、直ちに作業に取り掛かる。
少女たちのまじないともとれるような呟きが満ちる。

四人

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。
柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。
柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。
柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

チエ

ねえ。

ミキ

んー？

チエ

ねえ。

ミキ

何？

カホ あ、間違えた。

ユカ カホちゃあん、平気？

カホ へへへ。

ミキ 気を付けてよ。

カホ あーい。

チエ ねえ。

ミキ あれ、ごめん、なんだっけ。(チエに)

ユカ ちよつと貸して。だからさ、これをこうやってこうやってこう。

カホ はーはー。

ユカ わかった？できる？

カホ おっけ。こうでしょ。

カホ、何かが違う。

ユカ 違うよ、こうやってこう。

カホ こうか！

ミキ・ユカ ちがーう！

カホ えええ。

ミキ こうやって、こうやって、こうやって！こう！

カホ あ、わかったわかった、まかせてまかせて。

カホ、作業に戻るがやはり何かが違う

ミキ やっぱそれユカがやったほうがいいんじゃない？

ユカ いいわよ、やろっかー？

ミキ ユカそれ得意で担当が長かったからさ、慣れてるし。代わんなよ。

カホ だいじよぶ。まかせて。

ミキ ていうかユカがやったほうが早いんだよねえ。

カホ まあいいから見てなって。

ユカ ああ、そうそう、そんな感じ。できたできた。

カホ ほらねー。

チエ ねえ。

ミキ ああ、ごめんごめん、チエ何だった？

カホ あ、間違えた。

ミキ え、また？

ユカ ほんとに大丈夫？カホちゃん。

カホ だいじよぶ。だいじよぶ。ちよっとだけだから。

ミキ 大丈夫じゃないじゃん、もう。

ユカ ところでこれ何作ってるんだっけ。

間

ミキ・カホ さあ？

チエ ねえ。

カホ 生産量がー、効率がー。

ミキ 出た、営業部長モノマネ。妙に似てる。

カホ 利益率がー、生産性がー。

ミキ あの人一回でいいから現場出て手動かしてみて。どうか。

ユカ ほんとそれ、口ばっかよね。

ミキ けどあんたが一番言っちゃダメ！

カホ おっしやる通りでーす。

ユカ 生産性がー。

カホ 下がりがまくってまーす。下げまくってまーす。どうしたらいいですか、ミキせんせい。

ミキ 現場では手電動かさんかーい。

カホ 押忍、あ、間違え…

ミキ・ユカ え。

カホ ……でない。

ミキ・ユカ もー。

カホ へへへ、あ、間違えたわ。

ミキ ちよっとお。

ユカ カホちゃんさあ。

カホ へへへ。

ミキ へへへ、じゃないよ。ほんと勘弁して。

ユカ ところで今作ってるこれ、なんだっけ。

間

ミキ・カホ さあ？

チエ ねえ。

ミキ このライン最近係長に目つけられてんだからね、笑いごとじゃないのよ。

カホ え、そうなの。

ミキ そりゃそうでしょ、誰が原因？

カホ うそ、マジで。

ミキ 前に比べてここの横通る回数が増えるし、あとなんか目つきがいつも増してじっとり

しつこい感じでさ、ね。ユカ。

ユカ ……そーお？

カホ うそーん。

ユカ だーいじょうぶよお。

ミキ 大丈夫じゃないって。あんなにしよっちゅう係長がこっち通るのおかしいもん。前はせいぜい一日に二回がいいところだったでしょ。

カホ そうだっけ。

ミキ そうなの！

カホ そんな怒らなくても。

ミキ 怒ってない。

カホ そうなの？

ミキ そうなの。

ユカ ミキはただのDSだよねえ。

カホ そうなの？

ユカ そうなの。でもほんとはDMなんだよね。可愛いわよねえ。

ミキ 可愛いのそれ？

ユカ 可愛くない？

チエ ねえ。

カホ へー。ミキそうなの、意外。奥が深い。

ミキ 馬鹿じゃないの。だからそんなことより……うわ、言ったら来た。

靴音が近づいて止まる。慌てて何事も無かったかのように作業する四人。
再び歩き出し、遠ざかる靴音。

ミキ ほらあ！

カホ 本当だ。何あれ。

ミキ 何って決まってるんじゃない。

カホ 何が決まってるの。

ミキ 限りなくヒラに近いけど、一応あれで管理職だから管理しに来てるんじゃないの。

カホ この気高い私をか！

ミキ 気高かろうが何だろうが、ミス多すぎでともかばい切れないんでヨロシク。

カホ そんなあ。

ミキ あんたのやらかしに巻き込まれるのはごめんよ。

カホ どS！

ユカ 私もどSー。

カホ 知ってるー。凄いよね。

ミキ そうなの？

ユカ そうなの。

チエ ねえ。

ミキ あ、そうだったごめん、何？（チエに）

カホ ええ、どうしよう、目付けられる程ヤバいかなあ、私。

ユカ 大丈夫だってば。

ミキ どこが大丈夫なのよ、さっきのねちっこい目つきユカも見てたでしょう。

ユカ あれはカホちゃんをチエックしてたんじゃないから。

ミキ・カホ は？

ユカ カホちゃんじゃないの。

ミキ どういう事？

ユカ あたし。

間

ミキ あーもう！

カホ え、なになに。

ミキ ユカ、あんたまた！

ユカ うふふー。

カホ え、なになに。

ミキ あー、信じらんない。あーやだやだ。

ユカ いいでしょう。

ミキ 何がいいのよ。

ユカ うーん、係長可愛いじゃない。可愛くない？
カホ え。
ミキ 可愛い？あんた確かさつき私のこと可愛いって言ったよね。
ユカ 言ったわよ。
ミキ あのおっさんと私は一緒な訳ね。
ユカ 二人とも可愛いってだけのことよ。
ミキ 本気で言ってるんだ。
カホ えー、ユカそうなの？
ユカ そうなの。だめ？
カホ だめとまでは言わないけど若干気持ち悪いな。
ユカ わあ直球。逆に気持ちいい。
カホ え、気持ち良くなっちゃった？いやん。
ユカ いやんて。
ミキ よく言ったわカホ、珍しくいいこと言った。
カホ いやん？
ミキ 気持ち悪いの！
ユカ ひどおい。
ミキ だいたい何人目なのよ。
ユカ 社内？社外？

カホ あ、社外もいるのね。

ユカ さすがに社内で同時進行はやめとこうと思って。

カホ ああ、同時進行前提。

ユカ いろいろ差し支えるから。

カホ それがいいよ。

ミキ この前相手の奥さんと揉めたばかりじゃない。

ユカ その人とはもう別れたし。それに揉めてないよ、ちょっと変な電話や郵便物しばらくもらっただけ

だもん。

ミキ だけって。

ユカ うちの玄関前に貼り紙もちよっとあったかな。そのくらい。

カホ 揉めてるをずいぶん通り越してると思う。

ミキ そんな恐ろしい状況よく平気ね。

ユカ 今度は独身だから、別にいいでしょ。

ミキ そうなんだけどいや、そういうことじゃなくてさ。

ユカ 人の恋路よ。

ミキ そうだけど。

カホ けどまあ、あんまり想像はしたくないかな、色々と。仕事の直の上司だし毎日顔合わすし。

ユカ やだあ。

ミキ そう、それ！それなの。

ユカ 想像しないでよー。

カホ したくはないけどついするじゃん。やっぱり。

ユカ えー。

カホ モテるのはいいけどさあ、片っ端から全部受けんなよ。

ユカ だってこんな女ばかりの作業場なのよ、いいじゃない、うるおいうるおい。

カホ 相手を選べって言うてるの。ユカ守備範囲広すぎ。

ユカ 好きって言われると弱いんだもん。みんな可愛くなっちゃって。

ミキ ユカ完全に可愛いの矛先の向け方間違ってるよ。

ユカ 可愛いのがよ。

ミキ どころがよ。

ユカ だって人から好かれると自分の輪郭がはっきりする気がするじゃない。ほら見て。

ユカ、指輪を見せる。

カホ うわ、早速貢がせてるよ。

ユカ 人聞きの悪い。プレゼントしてくれただけよ。

ミキ へえ、これ何の石？

ユカ ええと、なんだっけ。そう、ガーネット。私の誕生石なんだって、私知らなかったんだけどね。
カホ 係長見かけによらずダメなことするなあ。

ユカ　ね、可愛いでしょ。
カホ　可愛いのは・・・ないかな。
ユカ　ぶー。
ミキ　ね、見せて。
ユカ　ん。

ユカ、指輪をそつと外し、ミキに渡す。ミキ、灯りに指輪を透かして眺める。

ミキ　不思議な色。ちょっと血みたいな色ね。血を固めたみたいな石。
カホ　ほんとだ、綺麗だけど。
ユカ　そう言われると・・・そうかも。
チエ　ねえ!!

間

チエ　私さっきからずっと一人でこれやってるの。
ミキ　チエ？
チエ　交代もしてない。
カホ　あれ、そうだったけ。

間

チエ 飽きたよー！ (号泣)

ミキ・ユカ・カホ わわわわ！

チエ 何回もさああ、呼んでんのにさあああ、誰も、だれもさああああ。

ミキ・ユカ・カホ、泣くチエを懸命にあやす。

ミキ ごめん、そういやさっきからなんか。

カホ 言ってたような言ってなかったような。

チエ み、みんなさあ、しゃべってばかりでさあ、あたしひとりでさあ、誰も、誰も代わってくんないし、

きやあきやあししゃべってんのにさあ、あたしひとりでさあ、ずうっとさあ、もうさあ。

ユカ チエちゃん、チエちゃん。

カホ ごめん、チエごめんって。

ミキ ごめんね、もう手に負えない馬鹿みたいにカホがやかましくてさ。

カホ あ？

泣き止まぬチエ。

ユカ ごめんねチエちゃん、あんなに呼んでたのにミキ冷たいよね。人の心が無いよね。

ミキ あ？

カホ ほんとにごめん、ユカのあまりのサイコパスぶりにはびびって返事ができなかった。

ユカ はあ？

カホ ごめんねー。

ユカ カホちゃん。

カホ ん？

ユカ 誰がサイコパスビッチ？

カホ 手に負えない馬鹿って？

ミキ 人の心が無いって言うてくれたのはどこのどいつ？

チエ もう！そうやってまた三人ばかりでチエを仲間外れにして！

ユカ あ、工場長。

ミキ・カホ・チエ えっ!!

ミキ うそ、どこどこ？

カホ ちよっと、どこよ？

ユカ ほら、あそこ。

ユカ上方を指さす。

チエ　　えー見えないー。
ユカ　　あそこだってば。
チエ　　あー!! いたー!!
四人　　キヤーツ!! 工場長ー!

四人、上の方に向かって一斉に叫ぶ。

ミキ　　あ、ねえこっち見てる? こっち見てるんじゃない? ちよっと!
カホ　　見てる見てるよ、こっち見てる。工場長、うそ信じらんない。
チエ　　はあー、工場長ー。
四人　　カッコいいー。
チエ　　シュツとしてるー。
カホ　　ねえ、あんなのあり? マンガなの? 王子じゃないの?
ミキ　　それにあの知的で端正な横顔・・・柔らかな物腰・・・優雅な手つき・・・まるではるか上空を飛ぶ
　　　　大きな白い鳥、崖に咲く一輪の白百合・・・
チエ　　シュツとしてるー。
カホ　　語彙力ー。あ、やだうそ、手振ってる!
四人　　きやー!

四人、懸命に手を振り返す。

チエ 手振られた、ラッキー！

ユカ 手指の形まで綺麗ねー。

カホ ああ、行っちゃった、久しぶりにいいもん見た。

ユカ 男を見た目で判断したくないけどあれは仕方ないわよね。現実離れしてるもん。

ミキ 工場長…私のオアシス…（泣く）

カホ え、泣く？

チエ ミキ泣かないで。

ミキ だって、工場長が、あの尊い工場長が、あたしに手を振ってー！（泣く）

チエ ミキ、別にミキだけに振ったんじゃないよ。

ミキ ひどい！（崩れ落ちて泣く）

カホ ミキマジ惚れだもんなあ。工場長って年いくつだろ？

ユカ 若く見えるけどわかんないわね。落ち着いてるし、なんせ工場長、だし。

カホ すぐーくデキる人でウルトラハイスピード出世なのかな。

チエ だったらすごーい。それに色白でお肌キレイだよねえうらやましいー。

ユカ ほーんと。あと何あれ、いつ見ても脚なが。ヤバーい。

カホ あんた係長は？

ユカ 工場長は別格。見てるだけでも気分いいじゃない。高嶺の花。

カホ　へー、そんなもんかね。

ミキ　あんだ！工場長にまで手出す気じゃないでしょうね。工場長のことを汚い見方しないでよ！

あたしの工場長を汚したら許さないから！崇るわよ！

カホ　おお、へんなスイツチ入ってるう。

ミキ　うるさい！

カホ　ひっ。

ユカ　手を出しても届かないのが高嶺の花っていうの。話したこともないわ。

チエ　いつも高い所にいるしね。

ユカ　そうね。

ユカ少し笑う。

ユカ　届かないからいいこともあるのよ。

チエ　そうなの？

ユカ　そうなの。

ユカ、チエの頭をなでる

チエ　？うふふ。

千エ、嬉しそうに笑う。突如怒声が響く。

シヅ
こおりゃあー！

班長シヅ、腰の曲がった老婆である。怒りながら杖をついて登場。

カホ
うわ、びっくりした！

ミキ
出た！

シヅ
何が出たんじゃい！

ミキ
いえ、なんでも。

シヅ
さっきから見とったら口ばかり動いとるがな、手！動かしなさいよ！ほれ手！次の窯に間に合わな

いよ。

四人
はーい。

四人、慌てて作業に戻る。

シヅ、苦虫を噛み潰したような顔をしながら、吐き捨てる。

シヅ
まったく若い娘は目を離すとすぐこれだ。あたしゃ見回るだけの男どもと違って自分の作業があるんだからね、世話かけんじやないよ。

ユカ ごめんなさいい。

シヅ 何がごめんなさいいだ、あんた有名だよ。可愛い声が誰にでも通じると思いなさんな。

カホ そりゃそうだ。

シヅ なんだって？

カホ いえ、なんでも。

シヅ ほれ、さっさと動いた動いた。夜が明けちまうよ。見てごらん、向こう側のラインはもう一回終わってコンベア止めてるじゃないか。あんたたちを待ってんだよ！

四人 はあい。

ミキ ええと。

チエ ミキ、チエ交代したいよ。

ミキ そうだ、そうだったね。

ユカ 仕事しよっか。

ミキ カホ、チエと代わって。

カホ えー、あたしさっきこれ始めたばかりだよ。

ミキ あ、そっか。じゃユカ。

ユカ チエちゃん、こっち。

チエ うん。

四人それぞれ持ち場に戻り、再び呟きながら作業に取り掛かる。

四人

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。
柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。
柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。
柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

ユカ

ところで、あたしたち何を作ってるんだっけ。

間

ミキ・カホ・チエ さあ？

四人

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。
柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。
柳の……

ユカ

痛っ。

ユカ、指を押さえている。ミキ、作業の手は止めないまま尋ねる。

ミキ

大丈夫？

ユカ

痛あ、うん、またやっちゃった。やだなあ、あーあ、血が。

カホ あたしもほら、指先ボロボロ。

チエ チエも。

ユカ カホちゃんとチエちゃん程じゃないけど。手入れも気を付けてるんだけどな。

シヅ、ユカの手元をのぞきこみ

シヅ どれ。

ユカ はい。

シヅ ああ、乾燥したところにずっとゴシゴシ擦っちゃうからね。この女は皆そうだよ。ほれ、これ巻いときな。

シヅ、ユカに絆創膏を差し出す。

ユカ あ、ありがとうございます。

チエ 手、ひびだらけになっちゃうよね。

ユカ 指輪なんか貰ったけど似合う指じゃなくなっちゃったな。ごめんね。

ユカ 指輪に謝る仕草をして外し、作業服のポケットに入れる。

ミキ

手袋すればいいって上の男の人たちは言ってるけどさ。

ユカ

わかる、微妙な力加減ができなくなるよね。一番薄い手袋でも何か嫌なのよ。

カホ

そうそう。

ミキ

あんた力加減なんてやってんの？

カホ

やってるよお。

ミキ

ほんとうに？

カホ

ほんとうよ。

シヅ、咳払いをする。四人また仕事を続ける。

四人

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

ミキ

仕事が嫌いなわけじゃないの。

カホ

お給料だって悪くないし。

ユカ

指先はすこし痛むけれど。

チエ

仕事仲間も結構楽しい。

ミキ

朝も昼も夜も止まること無く流れるこのベルトコンベアは。

カホ

まるでやがて海に注ぐ小川の流れのよう。

ユカ

無数のコンベアの小川が流れ着くその先には静かな海ではなく灼熱の窯。

ミキ

だとみんなは言ってる。

カホ

みんなは言ってる。

ユカ

みんなは言ってる。

チエ

ほんとうに？

ユカ

さあ、どうだか。

四人

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

ユカ

何を作っているのかは知らない。知ってる？

カホ

知らない。

チエ

何の為のもの？

カホ

知らないわ。

ユカ

誰が何の為に使うものなの？

ミキ なにかの部品じゃないの。

チエ 食べ物じゃないと思うけど。

ユカ 窯で焼くならレンガやタイル？

チエ どうせ焼くならお芋がいいな。ピザとか。

ユカ お芋やピザの匂いはしないわね。

カホ 知らない。別にどうだっていい。

ミキ お給料だって悪くないし。慣ればそれ程きつい仕事でもない。

ユカ ほんとうに？

カホ ほんとうよ。

チエ そうね、毎日毎日同じ作業を繰り返すだけ。

カホ お給料は悪くないし別に構わない。

ユカ 指先は少し痛むけれど。

ミキ 繰り返し作業に指と心を少しずつ削られている気はするけれど。

ユカ もらった指輪はもう似合わない。血を固めた色のガーネット。

チエ そんなこともきつと小さなこと。

カホ きつと気のせい。

ユカ 男の人たちが見回りに来る中、指から少しずつ血を流しながら作る何かが何なのか誰も教えてくれないけれど。

四人 そんなの知らない。

四人

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

柳の枝ゆらゆら、やな、

ユカ

シヅさん。

シヅ

なんだい。

ユカ

前から一度聞いてみたかったですけど。

シヅ、薄気味の悪い含み笑いをしながら

シヅ

野暮だね、レイディに歳なんて訊ねるもんじゃないよ。

ユカ

違います。

シヅ

じゃあなんだい。

ミキ

この作業中唱える呪文みたいな、歌みたいな言葉っていったい何なんですか。

カホ

ユカ！

ユカ

あんたたち、気になったこと無い？

カホ

いや、まあ、ねえ。えへへ。それ聞いちゃってもいいわけ？

ミキ

そうよ、いままでみんななんとなく聞いちゃいけないような雰囲気だったじゃない。

カホ

すみません、この子ちょっとさっき工場長で興奮しちゃって。

シヅ

工場長？

ユカ それはミキでしょ。

ミキ ちよっと！

カホ だってさあ。

ユカ この言葉について、前にここに勤めてた人に聞いてみたがことあるんですけど、やっぱり知らないって。ただその人もずっとずっと昔の先輩から引き継がれてるって。

ミキ ただなんとなく、ずっとみんなが言ってるから私も言ってたわ。

カホ うん、もう慣れちゃったし。ねえ。

ミキ 普通に習慣になってたけど。

チエ 言ってるのちよっと眠け覚ましになるよね。

カホ あー、あるある。

ユカ でもなんで言ってるのか誰も知らないんです。

シヅ そりゃまあ、誰も知らないだろうね。

チエ 眠け覚ましじゃないの？

ミキ シヅさん、何か知ってるんですか？

カホ だから聞いちゃダメだって。

シヅ 確かにそんな事を聞いてくるような子は今までいなかった。

カホ ホラ！

シヅ 別に構やしないよ。

シヅ、また薄気味の悪い含み笑いをしながら、

シヅ ただ知らない方が良かったってことは、世の中往々にしてあるけど。

ミキ えっ。

ユカ やだ、怖い話系？

チエ いやー、チエ怖いの無理！

シヅ、またもや薄気味の悪い含み笑いをしながら

シヅ 柳と言やあ、昔から幽霊がつきもんだね。

四人 は？

シヅ いや、こっちのこったよ。

カホ 今幽霊って言いました？

シヅ どうしても聞きたいのかい？

チエ いやー怖いの無理！

ミキとカホとユカの三人、チエを抑えて、ゆっくりとうなずく。

突如としておどろおどろしい雰囲気。

シヅ
カホ
この工場が昔なんだったか知ってるかい？
ええ……、よくあるパターンでいくと、もしかして、お墓、とか。

シヅ、静かに首を横に振る。

ユカ
え、じゃあ……

四人、顔を見合わせる。シヅ、ニヤリと笑い、

シヅ
工場だよ。

ユカ
なんだ。

ミキ
凄く色々想像しちゃった。

カホ
古井戸とかね。

シヅ
まあお聞き、もしかしたら墓や井戸のほうがましかもしれないよ。

カホ
ええっ。

シヅ
工場なんてものがこの国にやっところ存在するようになった頃からここには工場が建ってたんだ。
そう思うとちょっとしたもんだろ。

ユカ
そのころからずっと今と同じものを作ってたんですか？

シヅ
いや、作るものは時代が変わるたびに変わった。工場の持ち主も何度も変わったしねえ。

チエ お芋は焼いた？

シヅ どうかね、長い間には芋を焼いてたこともあったかもしれないね。

チエ いいな、お芋焼きたい。

シヅ 変わらなかったのはここにずうっと工場があったことと、今と同じようにたくさんの女達が手を動かしてものを作っていたことさ。

ユカ 女たちが・・・

シヅ そう、あんたたちと同じような娘たちが。長い長い間、それはもう大勢ね。

四人、お互いに自分の手を見つめたり顔を見合わせたりする。

シヅ それだけでもちよっとゾツとしないかい。

カホ いやあ、なんとも、ね。ハハハ。

ミキ なんていうか・・・ちよっと濃い話ね。

シヅ 濃いどころか特濃さね。なにを作るにしても、昔は機械もちゃんとしたものは無かったろうし、そのぶん人にかかる負担は大きかっただろう。今のようにはエアコンがあるわけじゃなし、暑さ寒さも堪えたらうね。

チエ 今もエアコンよく壊れてるよね。

シヅ ん？

ミキ しっ！

シヅ 何よりも昔は今よりずっと娘たちを酷い使い方をしていた。こんな言い方はしたかないけど、それが許されたんだ。そういう時代だった。

ユカ どのな？

シヅ とてもあんたたちの想像もできないようなさ。

四人、押し黙る。

シヅ あたしもずいぶん昔にずいぶん古い人から聞いた話だ。その人だって自分が体験した話じゃない。

けれど。

四人 けれど？

シヅ 激務のあまり仕事の際中に命を落とすものも少なからずあったというね。

一同、沈黙。

カホ じゃあ、あの、あれは、工場で仕事中亡くなった人の鎮魂的な・・・

シヅ 化けて出られても困るからねえ。

チエ 怖いよー！

四人、震えあがる。

シヅ
四人

嘘さね。

えーっ！

シヅ、嬉しそうに笑う。

シヅ

ひよっひよっひよ。

ミキ

もー、何なんですか、シヅさん。勘弁して下さいよー。

ユカ

私、完璧に信じちゃったわ。やだあ。

チエ

怖かったよー。

シヅ

本当だよ。

四人

えええー！

シヅ

嘘だよ。

四人

どっち！

シヅ

まんざら全部が全部嘘って訳でもないわさ。

カホ

えっ。

シヅ

幽霊はまだ見たことないけどね。大昔から工場がここにあるのも大勢の女たちがずっとこの場所で作業してきたのも本当だよ。それだけ多くの女たちが毎日自分をすり減らしてりゃ、ねえ。なんかしら、念とで

もいうのか、そんなのがここに降り積もっても、ちっとも不思議じゃないわな。

チエ

じゃ、仕事中に死んでる人はいないんだよね！

シヅ さあ、長い間にはいるかもしれない。さっきも言ったように時代が時代だ。

チエ いるんじゃない・・・

シヅ いわゆる幽霊ならまだいいけどね。

カホ えー、より怖い展開？

シヅ 考えようによっちゃ幽霊より面倒かもしれないねえ。これはあくまでも噂だけど。

ユカ どういう？

シヅ その古くから積もりに積もった女たちの念の渦みたいなものに、どういうわけかひよんなことから

巻き込まれちまうことがあるんだそうだと。

へ。

シヅ 今日みたいな月の出てる夜勤の夜には特にね。

四人 いやー！

ユカ またシヅさん、人を脅かそうと思って。嘘ばっか・・・

シヅ 嘘じゃあない。ただの昔から伝わる噂だけどね。

四人 えええええ。

カホ じゃあ、あの言葉はその、ずっと昔からの代々の女たちの念から身を守るための呪文：

シヅ そういうのもちと違う。

ミキ それじゃあ、

シヅ 言ったらう、ここにいたのは何も怖がることはない、あんたたちと同じような娘たちだったって。

今のあんたたちなら、もし念の渦とやらが本当にあるのなら、それに巻き込まれても彼女たちの

事を良くわかってやれるんじゃないかい？まあ、あたしやちよっぴり年食っちまったけどねえ。

四人、神妙な面持ち。

シヅ

あの言葉は死者への弔いでも怨霊からの守り札でもない、言ってみりゃこれから生きていく者たちへの、そうさな、願掛けみたいなもんだ。

ユカ

願掛け・・・

シヅ

おまじない、ってね。

シヅ、パンと手を打ち鳴らす。

シヅ

さ、働いた働いた。

四人、のろのろと作業を始める。

シヅ

サボるんじゃないよ！

シヅ、去る。

一同沈黙。

カホ わっ!!
三人 きゃー!
カホ へへへ。
チエ もう!
ユカ カホちゃん!
カホ 一応ね、お約束。
チエ 怖いよー、何か出たらどうすんの。
ユカ 出ないわよ。
チエ だって怖い話すると出るって言うじゃん。ほら、月も出てるよ。こんな古い所で、
カホ 月が出てもオバケは出ないよ。(見回して) 古いけどさ。
ユカ (見回して) 古いわね。
チエ カホだって怖かったくせに。
カホ ふん。
ユカ 態度わるー。そんなんだとモテないよ。
カホ うるせえ、ほっとけ。
ミキ ・・・結局、よくわからん。
カホ あー削られたわー、色々。
ミキ なんなのあの人が、散々脅すだけ脅してあんなフワツとしたオチってどういうこと?
カホ そもそもユカが変なこと聞くからじゃん。

ユカ　ごめーん。前から気になってたんだもん。ていうか気になんなかった？

カホ　もういいよ、あたしもともとどうでもいいもん。

チエ　うー怖かったよー。なんかよくわかんないけど怖かったー。

ミキ　参ったわね、仕事もまだまだこれからだってのに。

カホ　おかげで変な疲れ方しちゃった。仕事すんのやだ。

ミキ　ちよっと、これ以上足引っ張らないでよ。

カホ　いちいちうるさいな。

ミキ　少しは真面目にやれって言ってんの。

カホ　は？さっきまで自分もノリノリで無駄話聞いてたよね。

ミキ　聞いてないわよ。

カホ　聞いてたし。

ミキ　聞いてません。

カホ　聞いてたでしょうよ。

ミキ　聞いてません！サボってばっかのアンタとは違うんです

カホ　しつこいなあ、なに逆切れしてんの。

ユカ、言い争いを尻目にポケットから指輪をだして指にはめたり眺めたりする。

チエ、その様子を見邪気に眺める。

ミキ 逆切れしてませんー。ホントのことですー。

カホ はいはい、わかった。もうそれでいいよ。

ミキ ちよっと、それ余計腹立つんだけど。

カホ こいつ面倒くせえな。どうでもいいって言ってんじゃん。

ミキ あんたすぐそうやって面倒くさがるからダメなのよ。

カホ 何がよ。

ミキ だいたいあんたがミス多くて仕事が遅いのでどんだけ迷惑かけてるかわかってんの？

カホ は？今その話関係あんの？訳わかんないわ。

ミキ 普段から迷惑だと言ってんの。適当なことはかり言ったりやったりしないでくれる？

カホ 偉そうー。工場長に手振られてアホみたいに大泣きしてたくせに。工場長の刺激が強すぎてネジ

飛んじやったんじゃないの？

ミキ それこそ関係ないでしょうが！

ミキとカホ、掴みあいになる。

ユカ・チエ、二人の間に割って入る。

ユカ・チエ どうどう、どうどう。

ミキ・カホ フーッ!!

チエ 猫ちゃん！落ち着いて！よしよし。(カホを撫でる。)

カホ 誰が猫じゃい。(撫でられてかなり落ち着く)
ユカ はいミキ、やりすぎの助。

ユカ、ミキの背を優しくさすりながら激しくデコピンする。

ミキ 痛っ！ううっ、だってあいつムカつく。
ユカ 普段は仲いいでしょ？どうしたの、つまらないことで。
ミキ いつもあたしが我慢してんのよ！
カホ あらそれはすみませんでしたー。
ミキ ほら腹立つ！
カホ お互い様でーす。いつも上からありがとうございまーす。
ユカ カホちゃんも煽りすぎの助。

ユカ、カホを激しくデコピンする。

カホ 行ってっ！
ユカ ミキはしっかりしてる様に見えるから色々任せられちゃうけど、そのぶん脆い所あるの、知ってるでしょ。あんまり何でもポンポン言わないの。
カホ だって先にキレたのそっちだよ。

ミキ
ブツブツ最初に文句言ったのはそっちじゃない！

ユカ、ミキとカホの両方に恐ろしく素早くデコピンする。

ミキ・カホ
あいたっ。

ユカ
カホちゃんが仕事中ミキに世話かけてんのは事実。ミキはそろそろいい加減落ち着け、ん？

カホ
・・・へーい。

ミキ
うー。

ユカ
チエちゃん、こっちもお願い。

チエ
あい！猫ちゃん、落ち着いて。(ミキをなでる)

ミキ、なでられて少しずつ落ち着く。

チエ
ねえ。それよりさあ。

ユカ
んー？

チエ
あのさあ。

ユカ
うん。

チエ
これさあ、

ユカ
どれ？

チエ 今作ってるやつ。

ユカ ああ。

チエ これって……

チエ、作っている「何か」を手に取り、ユカに見せる。

ユカ どうしたの？

ミキ・カホ なになに？

「何か」は薄くぼんやりと赤い光を放っている。

次第に光は強くなり四人の姿を赤く染める。

その時食堂の調理人アニータ登場。

何も起こらなかったかの様に「何か」は光を失う。

アニータ カワイ子ちゃんたち、ごはんですヨー！

四人 アニータ？

アニータ ハイ、食堂に来てクダサーイ。はやく来ないと冷めちゃいますヨー！ ドシタノみんなコワイ顔シテ。カワイイ顔がダイナシですね。ミケンにシワが！ホラ、ミケンにシワが！若いのにタイヘン！
美味しいごはん食ベマシヨ！しあわせ！今日は、アニータ特製カニクリームコロッケ！

チエ 食べたよ。

アニータ エ？

チエ カニクリームコロッケ。さっき。

アニータ エ？

チエ 美味しかった。

アニータ ファ？

ユカ 私たちもう休憩終わったの。次はあっちのラインの子の番じゃない？

アニータ オウ、ホントですか？オー、ゴメンナサイ、マチガエマシタ。お詫びにひまわりのタネ食べますか？

アニータ大袋に入ったひまわりのタネを出す。

カホ 食べない食べない。

アニータ じゃ、かぼちやのタネ？

カホ なんてタネ縛り・・・

ミキ でも今日も凄く美味しかったよ、カニクリームコロッケ。衣サクサクでクリームは熱々とろとろで。

アニータ天才。

アニータ ソデスカ？それはヨカッタ。

カホ そう！カニの風味がふわっと濃厚でさ。良いカニ使ったでしょ。

アニータ カニカマですヨ。

カホ えー。

アニータ 日本のカニカマのクオリティはサマジイです。カニに対する狂気めいた情熱を感じマス。スバラシイ。

カホ 本物のカニじゃなくて一瞬下がったテンションを凄い角度から上げられた。

ミキ 美味しいのは本当に美味しかったんだからいいんじゃない？

カホ まあね。

アニータ 明日は同じカニカマを使ってカニトマトクリームスパゲティとアスパラガスとブロッコリーのサラダスパニッシュ風デス。

チエ わー、楽しみ。

カホ カニカマは譲れないポイントなんだね。

アニータ 予算は限られてイマスから、その中でいかに安く、シカシ美味しく、ボリュウムもあり、ウツクシク、そして食後のカプチーノだけはちゃんとエスプレッソにスチームドミルクで提供できるようにココロガケているのデス。

ユカ かつこいい、プロだわあ。仕事に美学を感じる。

カホ 惚れんなよ。

ユカ もう惚れた。アニータのごはんだけがここの楽しみだもん。

カホ 男より？

ユカ もちろん。

ミキ ありがとねアニータ、あの本格カプチーノのカフェインのおかげで今夜も夜勤頑張れる。

アニータ オウとんでもない。汗顔の至りデス。アナタたちにならうやって喜んでもらえるのなら、私もモット

精進セネバ。

チエ アニータ難しい日本語いっぱい知ってるねえ。

アニータ フッフ、大事なカワイ子ちゃんたちとキッチンとコミュニケーション取りたいデスからね。日々勉強デス。

四人 アニーター！

四人、アニータに駆け寄りしがみつく。

アニータ オウ、どうしましたか？

ミキ 疲れてんのよー！この砂漠みたいな工場で！

ユカ まともな優しさが刺さるの！

カホ 社員食堂の女神の慈悲が心のささくれに沁みる！

チエ おかあさん！

アニータ フッフ、アナタタチみんなとてもイイ子。

四人 うわーん。

アニータ みんなトテモ頑張り屋サン。私の国の子供たちと同じ。イイ子タチにはゴホウビをあげないとデスね。

四人 ごほうび？

アニータ 今晚お仕事頑張ったら、朝トクベツにオヤツを用意シテあげマス。

四人、歓声をあげる。

カホ やったあ、ほんと？

チエ オヤツってなにになに？

アニータ バッタータ・ドゥーセ・アツサーダ。

ユカ えー、なにそれ呪文みたい。

ミキ なんだかわかんないけど高級そう。

アニータ フッフ、とても美味しいデスよ。私の国でもみんなダイスキ。

チエ 楽しみい。

アニータ オタノシミニー！ガンバってクダサーイ。

アニータ去る。四人持ち場に戻り手を動かしながら

ミキ よし、仕事仕事。

ユカ やっとなんとかやる気出たね。

カホ 何て言ったっけ？カッタータ・ド・パトロール？

チエ わかんないけど楽しみだねえ。

カホ うんうん。

ミキ 何語だろ、てかアニータどこの国の人？

ユカ ブラジルかなあ。メキシコ？

カホ スペインじゃなかった？

チエ サッカー強いところばいよね、なんとなく。
ミキ チエてきとー。
カホ それな。

四人笑い合い、作業を続ける。

四人

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。
柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。
柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。
柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

四人、手を止めることなく、

ユカ やっぱり仕事してるとつい言っちゃうわね。
カホ 習慣って怖い。
ミキ すでに反射かも。
チエ でも眠け覚ましにはなるよ。
ミキ うーん、眠け覚ましっていうより・・・
ユカ 何？

ミキ うーん、上手く言えないんだけど。

カホ 珍しく歯切れ悪いじゃん、どしたの。

ミキ うーん。

ユカ それにしてもシツさんて凄いわね。

カホ 激しいばあちゃんだよねいろんな意味で。

ユカ あの年で杖もついているのに私たちと同じように作業ってさ。

ミキ でも仕事になると作業無茶苦茶早くない？。

ユカ さすがに年季が違うから。慣れかなー。

ミキ まあちよっと仕事荒いけど。

ユカ 言えてる。

カホ 若いもんには負けん！という謎の気迫を感じるよね。

ミキ そうそう。

ユカ あの人の道一筋らしいから、プライドはあるのかも。

ミキ ちよっと一筋が過ぎない？

カホ おかげで、可愛いおばあちゃんってよく言うじゃん。あの幻想をバーンと砕いてくれた事には感謝

ミキ してるわ。

ミキ バーンとね。

ミキ・ユカ・カホ笑う。

ユカ 可愛いおばあちゃんか。

ミキ うん。

カホ あれ嘘だよね。

ミキ うん？

カホ 可愛い訳ないじゃん。

ミキ うん。

ユカ だってあたしたちみたいなのがずうっと年取ってるだけだもんね。

ミキ・ユカ・カホ うふふふふ。

ミキ あ、もうすぐ休憩だけどうする？

カホ やったね。

ユカ 今日中断多くて進みが良くないし続けてやろうか。

ミキ そうね。

ユカ ちよっと今休むと後が苦しいかも。

チエ そうする。休憩ナシねー、そのまま作業続けて。

カホ えー。そんなあ。

ミキ ある程度できたらちよっと休みとるから。

カホ はーい。

ミキ チエもいい？やめずに続けるよ。

千工、返事がない。

ミキ

千工？

千工、返事がない。

ミキ

チーエー。

千工

あっ？

ミキ

聞いてた？

千工

ああ・・・うん。(少しぼうつとしている)

ユカ

平気？

千工

へーき・・・このまま続けるんでしょ。

ミキ

うん。いける？

千工

いけるいける。

ミキ

よし、じゃ行こう。

四人、肅々と作業を続ける。

四人

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。
柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。
柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

ミキ あのさ。

カホ うん。

ミキ さっきの話なんだけど。

カホ なんの話だっけ。

ミキ 眠け覚ましていうよりって話。

カホ ああ、この呪文じゃなくてええと、おまじない？

ミキ こう、中に入っていく気がしない？

カホ 何の。

ミキ うーん、そこが上手く言えないんだけど、何かの。

カホ 何言ってるの。

ミキ わかんない？

カホ わかるかい。

ミキ 伝われ・・・(念じる)

カホ これ何の時間よ。

ユカ そこ、もうケンカしないのよ。(デコピンの構えをする。)

ミキ・カホ してないしてない。

ユカ 次は一発じゃ済まないわよ。

カホ どS・・・

ミキ んー、わかんないかな、こう、ずっと唱えながら手を動かしていると持って行かれるっていうか、連れて行かれるっていうか。

カホ ちよっとお、またホラーテイストになってるよ。大丈夫？

ミキ わかんないかな、伝われ。 (念じる)

チエ わかるー。

ユカ・カホ わかるの?!

チエ うん、わかるー。

ミキ チエ、わかってくれたの!

チエ うん、こう、ぐるぐるぐるーってなることあるよね。

カホ ぐるぐる・・・なったことある？

ユカ ううーん、どうだろ。

チエ ぐるぐるぐるーってなってきたゆうーって入るの。

ミキ ああー!、私そこまでじゃあないけど、ぐるぐるしてきゆうーってなる一歩手前、きゆうーの入り口の感じ、すごくわかる!

ユカ・カホ わかるんだ・・・

チエ チエはいつもきゆうーって入ったらポンツとなるよ。

ユカ・ミキ・カホ きゆうーって入ったらポンツ?

チエ うん。そんでサアーツとなる。

ユカ・ミキ・カホ サアーツ・・・

カホ だめだ、ハイレベルすぎる。

ユカ 最初から最後まで何のことかわかんないわ。

チエ さっきもなつてたよ。

ユカ・カホ ええっ！

ミキ チエ、ポンってなつてサアーツとなつたらどんな感じなの？

チエ 何も聞こえない。

ミキ 何も？

チエ 何も。すぐ静かだけど、でも手は動くし、何でもわかるの。

ユカ 聞こえなくてもわかるの？まわりのことも？

チエ うん。わかるよ。

カホ そういえば、チエって・・・

ユカ 何？

カホ あたしたちが喋ってる時も黙々と作業してることが多いなって・・・

間

カホ あれ、きゅうーポンサアーツ、なのかな。

ユカ　なのかな。

間

間

ミキ　なのかな。

チエ　うん。

ユカ・ミキ・カホ、一斉にチエを見て互いに目配せをする。

チエ　みんなもなってるよ、さっきもなってた。

ユカ・ミキ・カホ　えええー！

ユカ　そんな、私達なってるわよ、ねえ

ミキ、カホ頷く。

チエ　なってるってば。いつもよくなってるもん。

ミキ
サアーツて？
チエ
サアーツって。

沈黙。

カホ
仕事・・・しよっか。
ミキ
・・・そうね。
ユカ
そうよ、時間、間に合わなくなっちゃう。急がないと。
カホ
そうそう、仕事仕事。ほらチエ、やるよ。
チエ
うん。おしごとおしごと。

四人、仕事にとりかかる。

四人
柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。
柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。
柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。
柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。
柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

チエ
おかあさん。

カホ おかあさん。

ミキ おかあさん。

ユカ えっ。

ミキ 何？

ユカ 何って・・・

チエ どうかした？

ユカ あんたたち・・・

カホ ユカ？

ユカ ……どうもしない。

黙って手を動かし続ける少女たち。

ミキ ……今サアーツてなってるのかな。

ユカ なってなんかないわよ！

ミキ ユカ？

ユカ ごめん。

ミキ いいけど。

ユカ ……

ミキ ユカ。

ユカ 苦手なのよ、ああいう話。

ミキ え、ああ。チエの。

ユカ うん。

ミキ ごめんね。

ユカ ううん。

ミキ ごめん。怖かったの？

ユカ 怖いのかな。あんな事、自分が自分でなくなるみたいで嫌じゃない？

ミキ よく、わかんないけど。

ユカ 自分が自分でなくなるなんて。

ミキ ……。

ユカ うん、やっぱり怖いのかも。

ミキ ごめんね。

ユカ うん。

四人 柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

柳の枝ゆらゆら、やなぎのえだゆらゆら。

作業に没頭し我を忘れる四人。唱える言葉は静かに加速してゆき、耳鳴りの様に聞こえる。
突如しんとして月明りが手を動かし続ける四人を照らす。
暫し沈黙の後チエが口を開く

チエ あちこち痛いね。

カホ たまんないね、用足しの暇もくれないんだから。

ミキ 牛小屋と一緒にさ。

ユカ それでもあのまま村にいるよりはましよ。

ミキ まだごはんは食べられるもの。

カホ ほんとうに？

ミキ ほんとうよ。

チエ 売られることを考えりや随分といいよ。

カホ あの子はどうした？

ユカ 風呂だよ。

カホ ああ。

チエ あの子の番かい。

ユカ 下衆の番頭だけど機嫌とつときや少しはやりやすいからね。

チエ ふん。くだらない。

カホ くだらないね。

ミキ 風呂くらい普通に入りたいもんだ。

ユカ それでも売られることを考えりや随分といい．．．

ユカ、我に返る。他の三人の様子はそのままである。

ミキ それでも売られることを考えりや随分といいよ。

カホ ほんとうに？

チエ ほんとうよ。

ユカ ミキ、カホちゃん、

カホ そういや、隣村から来てたあの小柄な色の白い子、死んじゃったってね。

チエ またかい、胸の病だろ。可哀そうにね。

ミキ おっ母さん。

チエ 国が恋しいのかい。

ミキ そりゃあね。

ユカ チエちゃん、ミキ。ねえミキ。

カホ 売られたも同然じゃないか、あたしたち。

チエ 村じゃろくに食べるもんもないだろ。

ミキ そうだね。あんたたちもいるしね。ただ、こんな月の出てる晩にはどうしても思い出すんだ。

やがてすすり泣く声が聞こえる。ユカが泣いている。

ユカ やめて。

ミキ 泣いてるの？

ユカ 怖いの。

カホ 泣くほどこわいの？

ユカ 怖いの。

チエ 怖くないよ。

ユカ 怖い。

ユカ、うづくまる。

チエ 怖くないよ。

ユカ 怖いよ、何も聞こえないなんて。じゃあ今みんなの声を聞いて私の声で話してる、これは誰なの。

私の声はきこえないの？

カホ 聞こえてるよ。

チエ でも聞こえてないの。

ユカ 聞こえてないの？

ミキ でもわかるの。

ユカ わかるの？

ミキ とてもよくわかるよ。

ユカ 私はここにいます？

カホ いるじゃない。

ユカ みんなはここにいます？

チエ いるじゃない。

ユカ みんな、

間

ユカ どこにも行かないでね。

ユカ、その場で眠ってしまおう。三人、幼い子供となりユカを覗き込む。

チエ ユカちゃん、寝ちゃった？
ミキ 寝ちゃったね。
カホ あそぶやくそくしてたのね。
ミキ どうしよう。
チエ まあいいや、さきにあそんでよう。
カホ なにしてあそぶ？
チエ ゴムとび！
カホ ゴムがないよ。
ミキ かくれんぼ！
カホ さんになじやなあ。ユカちゃんおきてからにしようよ。
ミキ・チエ おままごと！
ミキ だれがおかあさんやる？
ミキ・カホ・チエ あたし！
カホ やなぎのえだゆらゆら。
ミキ だるまさんがころんだ？
カホ ちがうよ、やなぎのえだゆらゆら。
チエ なあに？
カホ おまじないだって。おばあちゃんが言った。
ミキ ねがいごとがかなうのかな。

千工 てきをたおすんじゃない？

カホ ユカちゃんを起こしてみようか。

ミキ・カホ・千工 やなぎのえだゆらゆら！

三人、老女となる。

カホ どうしたもんかね、この子ちつとも起きやしないじゃないか。

ミキ まったくいつまでたってもさみしがり屋さんだねえ。

千工 男をとっかえひっかえしたところで結局あたしたちがいなくてどうにもなんないんだから。

ミキ ホント、世話が焼けるったらありやしないよ。

カホ 甘えん坊でいったい誰に似たんだかねえ。

千工 おや、あんただろ。

カホ あたしかい？冗談おいてないよ。あんたこそどうなんだい。

千工 ひゃひゃひゃ、勘弁しておくれよ。あたしを幾つだと思ってるんだい。

ミキ さあ、幾つだったかね、そんなのとうの昔に忘れちゃったよ。

カホ しかし男と言や工場長はイイ男だったねえ。

ミキ そんなのいたかい？

千工 やなぎのえだゆらゆら。

三人、子供となる。

ミキ ユカちゃんおきた？

カホ おきないね。

チエ よくねてるなあ。

カホ きもちよさそう。

カホ、眠るユカをポンポンと規則正しくやさしく寝かしつけるようにそつとたたき続ける。

ミキ あ、それきもちいいよね。

カホ うん、ねるときにおかあさんにやってもらおうの。

ミキ あたしも！

チエ も！だいすき！

カホ あまえんぼー。

チエ カホちゃんだって。

カホ へへへ。

ミキ ねえ、あたしもやって！

ミキ、寝転がる。カホミキをポンポンする。

ミキ はー、ぐう……。 (寝たふり)

チエ チエにもチエにも!

カホ、チエをポンポンする。

チエ ふー。ぐう……。 (寝たふり。クスクス笑っている。)

カホ ねえ、おきて、おーい、おきろー、わらってるじゃん。おーい……。よおし……。やなぎのえだゆらゆら!

三人、老女となる。

カホ しかし男と言や工場長はいい男だったねえ。

ミキ そんなのいたかい?

チエ よく言うよ、あんなにのぼせ上ってたくせに。

カホ ユカに、手え出すなよ! ってえらい剣幕で喰らいついてたじゃないか。

ミキ 覚えて無いねえ。

チエ ボケてんじゃないかい。

ミキ ふざけんじゃないよ。覚えて無いんなら、所詮その程度の男なのさ。

チエ やなぎのえだゆらゆら。

三人 キャーッ!!工場長ー!!

チエ はー、カッコいいー。

カホ あんなのあり?マンガなの?王子じゃないの?

三人 工場長ー。

チエ シュツとしてるー。

ミキ 工場長、私のオアシス：：(崩れ落ちて泣く)

チエ やなぎのえだゆらゆら。

カホ しかし男と言や工場長はイイ男だったねえ。

ミキ そんなのいたかい?

カホ よく言うよ、あんなにのぼせ上ってたくせに。

ミキ 覚えて無いねえ。

チエ ボケてんじゃないかい。

ミキ ふざけんじゃないよ。覚えて無いんなら、所詮その程度の男なのさ。これ、

ミキ、眠っているユカをつつく。

ミキ 起きてんだろ。

ユカ、クスクス笑っている。

ミキ 　いつまでやってんだい。狸寝入りなんて若い娘のやるこったよ。

ユカの笑い声が娘のものから老女のものに変わる。ユカ、起き上がる。

ユカ 　年を取ると眠りが浅くていけないよ。

ミキ・カホ・チエ　　ババアだねえ。

ユカ 　あんたたちこそ、おままごとのお母さんなんだろう、それじゃあすっかりヨイヨイのおばあちゃんじゃないか。

チエ 　何でもいいんだよ、どうせ同じ事だろ。

カホ 　そうそう。

ユカ 　やだねえ、自分がこんなババアになるなんて思ってもみなかったよ。これじゃ見分けも付きやしないね。
カホ 　そりゃあたしだってそうだよ。みんなそうさ。目も当てられないよ。

四人 　ひゃひゃひゃひゃひゃ。

ミキ 　何も怖い事なんてありやしないよ。

チエ 　やなぎのえだゆらゆら。

四人、元の四人となり、立ち上がる。

ユカ そうよ、あたしあんなたちがいれば平気なの。

ミキ 仕事が辛くても、恋で傷ついてても。

カホ 寒くても、眠くても、おなかやすいても。

チエ 耳の奥がしんとするほど寂しくても。

ユカ やなぎのえだゆらゆら。

カホ あたしたちのおまじない。

ミキ 工場を窯まで流れる無数のベルトコンベアの川面を流れる、わたちの作った笹舟のような何か。

ユカ わたちの白く細い腕はコンベアの川縁を風にそよぐ柳のように絶え間なく動き続ける。

カホ やなぎのえだゆらゆら。

チエ やなぎのえだゆらゆら。

カホ どれ程手を動かし続けても終わりは見えない。あたしたちの指先と時間がどんどん削られていく。

チエ 少しずつあたしたちの血を指先から吸い取って沢山の沢山の舟が流れていく。

ユカ やなぎのえだゆらゆら。

ミキ やなぎのえだゆらゆら。

ユカ でもタダで私達を削らせないわ。

カホ お金じゃないの。

チエ お金はほしいけれど。

ミキ 楽しくなくちゃ。柳の枝のおまじない。

チエ みんなで、いっしょに。

ユカ おまじないに包まれながら舟に乗って運ばれた私達の血は。

ミキ 窯で焼かれて硬い硬い種になる。

ユカ 血を固めたガーネットになる。

カホ 倒れ朽ちた木から更に多くの芽を出し、川をもせき止める柳の木。

ミキ 柳の枝のおまじないで窯にたまった命の種はいつかきつと一斉に発芽し、根をはり、コンクリートを
食い破るだろう。

チエ あと少し。

ユカ この窯も壁もコンベアも屋根も、うねる緑が覆いつくすだろう。

カホ あと少しよ。

ミキ なにもかも飲み込んでひとりそこで風にそよぎ続ける巨大な柳。

ユカ いつかその揺れる葉を見て心癒える子がいるかもしれない。

チエ その日を夢見て。(眠る)

カホ その日だけを楽しみに。(眠る)

ミキ みんな共犯ね。(眠る)

ユカ 楽しい遊び仲間よ。(眠る)

転がって死んだように眠る四人。

シヅ、杖をついて登場。

シヅ
あれまあ。

シヅ、杖の先で四人をつつく。

シヅ
なんだい、このザマは。

シヅ、更に四人を杖でつつく

シヅ
これ、起きな！仕事中に。

誰一人びくりともしない。

シヅ
ああ、……アレにやられてんのかい。

シヅ、娘たちを暫し覗き込む。

シヅ
随分と深い所まで持って行かれてるね、アレも悪気はないんだろうけど、気に入られ過ぎだよ。さてどうするかね。ふむ。

シヅ 思案したのち何かひらめく。

シヅ
そうだ。

シヅ 一度退場し、すぐに出てくる。

シヅ
これでよし、と。

シヅ、転がっている四人を見回す。

シヅ
この子達はなんていうのか気がいいからねえ、揃いも揃ってめでたい話だよ。でも、全部あっちに

行っちゃうにはまだちと早い。あんたたち、まだ楽しみもあるんだろう？

シヅ、大きく手を打ち鳴らす。

シヅ
アニータ！

アニータ
カワイ子ちゃんたちー！バッタータ・ドゥーセ・アツサーダ！

四人、わずかに身動きをする。

四人 ：：バタータ・ドゥーセ・アツサーダ……
アニータ トテモ美味しいデスヨー！
ミキ なんか、いい匂いがする……
ユカ この匂い……
四人 焼き芋だー！

四人、飛び起きる。

チエ お芋ー！
ミキ やったあ！
アニータ フッフ、さあ、あっちに用意シテありますからみんなで食べマシヨ。
四人 しあわせ！
カホ しあわせ！
カホ あー。お腹減っちゃったあ。
ミキ なんかフラフラしない？
ユカ するかもー、寝起きみたいに頭重い。いつもより妙にだるいし。
カホ 仕事に没頭し過ぎたわ。
ミキ だーれが。
カホ あたしに決まってんでしょ。

ミキ 言ってくれるねー。

カホ お、なんか文句あんの？

ミキ ないわけないじゃん。

ユカ あら楽しそうね、ケンカ？（デコピンの構え）

ミキ・カホ してないしてない。

ミキ でも確かにちよっとボーっとするなあ。チエは大丈夫？

チエ 大丈夫じゃないよ、もうおなかぺこぺこ。

カホ あたしもー。

シズ あんたたち。

間

ユカ 何ですか？

間

シズ ……いや、何でも無いよ、お疲れさん。

四人弾ける様に笑う。

四人

お疲れ様でした！

ユカ

夜が明けて来たね。

チエ

お芋、お芋。

ユカ

いい匂い。

ミキ

すっかり焼き芋の口になっちゃった。

カホ

芋のモーニングでイモーニング！

ミキ

おやじー。

カホ

へへへ、はい、みなさんご唱和下さい。

四人

イモーニング！イモーニング！イモーニング！イモーニング！

四人、アニータ踊りながら去る。一人取り残されたシヅ。

シヅ

やれやれ。

シヅ、散らかった辺りを片付けようとしてやめ、深い溜息を吐いて去る。

終